

居場所として利用する喫茶店への意味付けに関する研究

1190554 森部晃平

高知工科大学経済・マネジメント学群

1. 概要

現在、教育現場や心理学において居場所の存在が注目されつつある。川村竜之介・谷口綾子の「まちなかの居場所の存在が地域との関係性・生活の質に与える影響に関する研究」(2013)では、居場所の存在が人々の生活の質や地域との関係性にポジティブな影響を与えているという可能性を示した。また、「本来の自分で居られる」「この場所は自分を受け入れてくれている」と感じることで、生活の質が高くなる可能性があると示されている。本研究では「本来の自分」とは何かを明確にし、人々にとって喫茶店とはどういう場所かを明らかにする。

2. 背景

高知県内の喫茶店数は全国でもトップクラスに多い。女性が働く中で外食産業が発達し、本格的な外食産業が成り立ちにくいという理由から多くなったと言われているが、住民のコミュニケーションの場としても役立っていると考えられる。アメリカの社会学者Ray Oldenburgは家庭での居場所（ファーストプレイス）と職場や学校での居場所（セカンドプレイス）とともに、個人の生活を支える第三の居場所（サードプレイス）は地域のコミュニティを活気づけるとした。近年の人口減少や少子高齢化により地域の活気は失われつつある。その中でまちなかの居場所（サードプレイス）は非常に重要な要素の一つになると考えられる。

3. 目的

本研究では、居場所として利用されている喫茶店を対象に「本来の自分」とは何かを明確にし、人々にとって喫茶店とはどういう場所かを明らかにすることを目的とする。

4. 研究方法

以下の条件で対象者を募集し、1時間程度のインタビューを行う。

1. 特定の喫茶店またはカフェに週1度以上の頻度で通っている
2. 半年以上の期間通っている
3. かつその喫茶店またはカフェは自分にとって心の拠り所であると感じている

4. 50歳以上の方

先行研究から、喫茶店を居場所と感じやすい50代以上の男女を対象にデータを比較する。対象者は高知工科大学「一般社会被験者プール」データベースに登録している50歳以上の方100名に50名ずつに分けて、メールにて募集。応募期間は1週間とする。

5. 調査対象者の概要

本研究では4人の対象者にインタビューを実施。以下に概要とインタビュー日程を述べる。

Aさん（50歳 女性）：2017年10月20日13:00～14:30

Bさん（68歳 女性）：2017年10月31日13:00～14:30

Cさん（66歳 男性）：2017年11月2日13:00～14:30

Dさん（53歳 男性）：2017年11月6日13:00～14:30

インタビュー場所はすべて高知工科大学永国寺キャンパスA415で実施。

6. データ収集結果

①Aさんの事例

Aさんは動物ボランティアをしており、その関係で動物ボランティアをしている方が集まるお店に行くようになった。Aさんは自身でも二匹の犬を飼っており、一匹は目が見えず、痴呆が進んでいる。そのため、時折世話に疲れてしまう時もある。そんな時、カフェに行けば店主さんが笑顔で迎えてくれ、「そこで入れてもらった飲み物とか、（飲むと）はい、元気になりますね」と発言。

また、Aさんは公的統計調査員の仕事にやりがいを感じており、工作中嫌な言葉を投げかけられたりして、辛く、挫けそうになるときもあった。そんな中、Aさんが毎年工業調査で訪れる仲のいいおじいさんがいた。

ある日、調査に訪れたAさんが家の前で声をかけたところ、おじいさんの工場は開けっ放しで誰もいない。同じことが3～4回あり、仕方がなくポストに調査員が来たことを知らせる手紙を入れた。その晩、おじいさんの息子さんと名乗る方から電話をもらい、おじいさんはすでに亡くなったと知らされる。Aさんは電話

を終え、涙が止まらなかった。

Aさんはおじいさんの事を「調査する上でなくてはならん人物。会いたい人。癒し。楽しみ」「お父さんに会えたらまた元気になるうて次に行けますから」という発言している、Aさんにとって調査する上で非常に重要な存在であったことが分かる。

Aさんにおじいさんのエピソードを紹介してもらった後、おじいさんとカフェの店主さんと通づるものがあるか?という質問をしたところ、

Aさん：あるかも知れんですね。気取ってないですね二人とも。全然頭で考えんづくものを言いゆうんですけど、人を傷ついたりとか、人を落とし込んだりとか、人の弱みを握っちゃうとか、一切そういうことはないですね。やっぱりそういう人って、人徳じゃなく、ホントに育った環境とか色々あるがかも知れんですけど。自然に出る言葉がね、柔らかいんですよ。うん。自然に頭で考えやせん言葉ですけど、馬鹿じゃなくとか冗談で言うたりしても、それは”馬鹿”じゃないんですよ。うん。なんていうのかなおじいちゃんにしても(店主)さんらあにしても、「またお前来たか」じいちゃん言うけど、「お前来たか」じゃなくてよう来たなの「また来たか」と思うがですよ私は。ニコニコ笑うて。ガラガラ笑うて。顔に出ますね、岡林さんにしてもおじいちゃんにしても。顔が似てます。

※Aさんのインタビュー中の会話から抜粋と答えた。

また、Aさんが二人から元気をもらえるという点でも共通しており、おじいさんが調査する上でなくてはならない存在であったというように、店主さんもまたAさんの人生においてなくてはならない存在であると考えられる。

Aさんにとって喫茶店は社会的な立場から離れた「本来の自分」を受け入れられ、また社会的立場へ戻るための活力を与えてくれる場所である。

②Bさんの事例

Bさんはギャラリーを営んでおり、その時のお客さんが開いた喫茶店に通うようになった。喫茶店で過ごす方は、本を読んだり、店主さんや他のお客さんと一緒に会話を楽しんだりしている。

Bさんに喫茶店に行くことで、他の生活に影響があるかと質問をした所、「変わらないかもしれないです」と答えた。そこで質問を変え、絵画で言えば中心的な対象物と背景のどちら

に喫茶店が当てはまるかという質問に対し、「サイン」と答えた。Bさんは家庭を背景、仕事を主題と捉え、そこに「無くてはならない」サインがあるという風に捉えている。

B：そういう風に、まあそうですね色々ですね。あるいはホームに帰るということですね。

(聞き手)：ホーム？

B：ホームというのは結局家があり、食住、お食事の支度、それからチビちゃんの話とか。世話までは今いかなんですけど、帰ってきて相手をしてあげて宿題を見てあげてみたい。というところですかね。そういう現実が待っていると。あつ、この方がわかりやす、非現実と現実ですね。その方がわかりやすいかも知れませぬね。60代としてはずっとそのアレですね

(聞き手)：60代としては？

B：現実、親がいて子供がいて、孫がいてみたい、時々ご飯を食べにくるから作らなくてはまたいけないという。あの旦那様だけじゃなくってこうぞろぞろとくるという。現実ですね。

(聞き手)：それはそれでいい時間なわけですね。

B：そうですね、嫌な時間ではないですね。

(聞き手)：だけれどもそれなりに色々大変なこともあると？

B：そうですね。はい、ということですね。

(聞き手)：非現実感っていうのは何によって感じられるように？

B：非現実感っていったら、現実が結局すごく忙しいっていかすべきことがいっぱいあるじゃないですか。だから非現実はいマイ・タイムというか自分の好きに使っていい時間をゆとりでコーヒーと音楽と、まあおしゃべりプラス本みたい感じですね。でも、それは学生時代から結構してたのでよく。まあ、女子大は近いで街に喫茶店がいっぱいあるので、そういうのはありますね。

※Bさんのインタビュー中の会話から抜粋

Bさんは仕事や家庭を現実、その他の自由に使える時間(ゆとり)を非現実と表現した。そこで先ほどと同様、ゆとりがあると現実の楽しみ方が変わるかという質問に対して「はっきり言ってそれは無いと思います」「自分に対してのご褒美的なものと考えてもらおうと、わかりやすいかな」と答えられた。Bさんの事例では仕事を頑張った結果、喫茶店というご褒美が待っているということである。

③Cさんの事例

Cさんは喫茶店へは必ず誰かと行くようにしており、主に会計事務所を経営する友人と行くことが多い。友人の事務所にお邪魔し

て話をするのも迷惑かと思い、近くの喫茶店で息抜きの雑談を楽しんでいる。

Cさんが喫茶店に行く理由は、立地や利便性の他に「不快感がない」ことで好感が持てるからである。いつも店舗の清掃が行き届いており、大雨や台風の後でも窓ガラスはピカピカだった。

Cさんがある日、たまたま喫茶店のお昼休憩が終わる10分前にお店に到着してしまった。すると、店員の方が店内をきれいに掃除し午前中の汚れを落としていたのである。だからこそ、いつも綺麗な店内を保っていたのだ。「建物と扉、ガラス、全て大事にされている」ことと、不快感がない店内にCさん自身愛着を感じているのではないかと考えられる。愛着のある場所で、古くからの友人と過ごすことで、居心地のよい場所になっているのではないだろうか。

④Dさんの事例

Dさんは元々郵便局員として働いており、その頃から喫茶店に行っていた。主に休日のみ、「ちょっと外の空気でも吸おうか」という気分で通っていた。

その後、Dさんが郵便局員を辞め、職を転々とした後、血液運搬の仕事に就いた。夜中いつ病院から電話がかかってくるかわからない状況で緊張感を保ちながら待機所で待ち、出勤になればサイレンを鳴らし、事故に気をつけながら素早く血液を届けなければならぬ。仕事後は「やってやった」という感覚になる。

Dさんはこの仕事が終わった後、モーニングとスポーツ新聞を楽しみに喫茶店へ行くが、そこでは郵便局員時代には無かった仕事の振り返りや緊張感を解きほぐしている。

Dさん：郵便局のときはあれですね、休みの日に何にもせんのももったいないんで、喫茶店行たくらいの感じやったですけど。今はそんなに朝ごはん食べに、いつものリズムを戻しに行きゆうって感じですね。

森部：郵便局の時とは喫茶店の意味付けってというのは

Dさん：ちょっと違いますね。

森部：喫茶店というのは今はリセットじゃないですけど・・・

Dさん：まあそうですね、リズムを元に戻すというか、感じですね。

森部：やっぱりリズムを元に戻すのは無くてはならないものですかね。

Dさん：そうですね・・・やっぱり喫茶へもよう行かんっていうのは相当疲れちゃうなっていうのはありますし

※Dさんのインタビュー中の会話から抜粋

Dさんは喫茶店へ「いつものリズムに戻しに行きゆう」という事である。Dさんにとって喫茶店は夜勤明けの緊張感が続く中で、本来の自分を取り戻すといった役割になっていると思われる。

7. 分析

Aさんの事例

Aさんは仕事のおじいさんと喫茶店の店主さんをオアシス的な存在と考えていた。これはAさんが表面的な立場を忘れ、受け入れられていると感じていたからだと考えられる。このことから、喫茶店は社会的な立場から離れた「自分」を受け入れられ、また社会的立場へ戻るための活力を与えてくれる場所であるといえる。

Bさんの事例

価値観の共有できる人と同じ空間に居ることで受け入れられているという感覚になることから、Aさんの事例に一部当てはまる。

Cさんの事例

友人と愛着のある場所で雑談を楽しむことから、受け入れられているという感覚になり、Aさんの事例に一部当てはまる。

Dさんの事例

Dさんは責任のある社会的立場から日常へ戻るために喫茶店を利用している。このことから、喫茶店は日常に戻ることを円滑にしてくれる場所であるといえる。

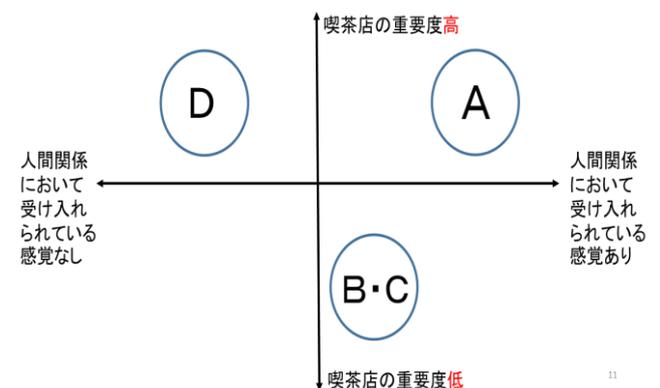


図1 各事例と喫茶店の重要度と受け入れられている感覚

図1からAさんとDさんの事例において、両事例とも喫茶店の重要度が高い。しかし、Aさんは喫茶店の店主との関係が密であること、Dさんは一人で喫茶店に行き店主との関わりはあまり無いことから場所として受け入れられておる感覚があるものの、人間

関係においては受け入れられている感覚は真逆のものとなる。

8. 結論

先行研究において、「まちなかの居場所」が生活の質へポジティブな影響を与える際の要因について、「本来の自分で居られる」

「この場所は自分を受け入れてくれている」と感じることで、生活の質が高くなる可能性があるとして示されている。

今回の事例から、A・Dさんとも仕事にやりがいを感じている。このことから、仕事中の「自分」も喫茶店での「自分」もどちらも重要な「本来の自分」であり、喫茶店に行くということは2つの「本来の自分」の間の移動であることがわかった。

喫茶店は人々を「もうひとつの自分」になることを円滑にし、また戻る時に活力を与えてくれる場所であるといえる。

9. 引用・参考文献

川村竜之介・谷口綾子「まちなかの居場所の存在が地域との関係性・生活の質に与える影響に関する研究」2013

レイ・オルデンバーグ著・忠平美由紀訳・マイク・モラスキー解説 サードプレイス コミュニティの核となる「とびきり居心地よい場所」みすず書房 2013